

大学等名	富山大学高岡短期大学部
テーマ名	テーマ1：地域活性化への貢献
取組名称	「炉端談義」方式による地場産業活性化授業 - 地域と一体となった授業計画・実施・評価委員会によるものづくり教育 -
取組学部等	高岡短期大学部
取組担当者	長山 信一
取組期間	平成16年度～平成17年度
Webサイト	<a href="http://gp.takaoka-nc.ac.jp/">http://gp.takaoka-nc.ac.jp/</a>

## 取組の概要

本学周辺地域の銅器・漆器など伝統的地場産業はここ十数年停滞気味である。

本取組はこの停滞の原因が企業・自治体その他関係団体・大学間の連携のあり方、すなわち、組織化の脆弱さにあると考え、地元関係者と教員・学生で構成する「授業計画・実施・評価委員会」を組織して、地場産業振興に効果的に寄与できる授業を展開しようとするものである。

鑄込み場の端に関係者が集まって、実際にものに触れながら議論を深めるような形態を目指し、これを「炉端談義」方式と名付けることとした。

本取組では、一つの授業の成果が次の授業の素材となって活用される連鎖型授業を展開して行く。その際、「炉端談義」委員会が最終評価に先立ち、複数の授業が終了した中間段階でも委員会が授業内容を点検評価して、必要に応じて軌道修正が行われる。

また、この方式では地場産業の生の声を授業に反映することができ、同時に大学の取組姿勢が地元に対して十分に説明されることで公開性が高められたものとなる。

## 実施の経緯・過程

### 取組の実施状況

平成16年度後期（選定時点）に事業実施体制確立の為「炉端談義」委員会を設立した。広報用「ホームページ」を上げたほか、プロジェクト支援機材の充実を図った。又、地場産業の市場情報収集の為の“伝統的工芸品のニーズに関するアンケート調査”や地場産業の実態把握の為の授業科目「デザインの進め方（デザインリサーチ）」を実施し、同時に連鎖型授業の授業計画や「プロジェクト実施計画」を策定した。

平成17年度前期には、連鎖型授業が実施され、様々なプロジェクトがスタートした。例えば、氷見市マイスター事業協同組合と大学の連携プロジェクト“地場産杉を使用したインテリア・家具の提案”及び同展覧会が開催された。なお、それら連携授業・プロジェクトの活動成果を公開する為“炉端談義シンポジウム”と“同展示会”が本学講堂・ホワイエ・エントランスホールで開催された。

平成17年度後期には、漆器プロジェクト“食器”の成果作品が工芸都市高岡クラフトコンペ入選を果たした。また、高岡銅器・セレクトショップバイヤーと学生の連携による“セレクトショップバイヤーの意見に基づく商品開発”プロジェクトは高い評価を得ると共に2作品の商品化も決定した。これらのプロジェクト活動は、学生にとってインターンシップと同等の有意義な体験となった。「炉端談義」プロジェクトの締め括りに“特色・現代3GP採択記念フォーラム”と“同展覧会”を開催した。最後に客観的な評価を得るため“「炉端談義」プロジェクト評価シート”を作成し、学外の地場産業関係者や学生中心に配布した。その結果とプロジェクト概要を整理して“「炉端談義」方式による地場産業活性化授業実施報告書”を作成し関係者に配布した。

プロジェクトの実施状況を概観すると、意識の高い教員、積極的に参加いただいた地場産業関係者や参加学生には惜しみないご協力を頂いた。ここに築かれた人間関係が財産として、本学の将来を位置付けると考えられ、また、この活動を通じて地場産業関係者から初めて地元の期待に応えてくれたとの評価を頂いた。

教育課程・教育方法の工夫

本取組は地元産業関係者と教員・学生で構成する「授業計画・実施・評価委員会」：“「炉端談義」委員会（プロジェクト）」を組織し、地場産業振興に寄与する授業を展開しようとするものである。

鑄込み場の端に関係者が集まり、実際にものに触れ“現場・現物主義”に徹して議論を深める形態を目指し“「炉端談義」方式”と名付けた。例えば、産業造形学科木材工芸コース・金属工芸コースや漆工芸コースの各プロジェクト、産業デザイン学科プロジェクト「デザインの進め方」等がそれに該当する。

一つの授業の成果が次の授業の素材となって活用される“連鎖型授業の展開”としては、地域ビジネス学科や産業デザイン学科のプロジェクトや授業がそれに該当する。

「炉端談義」委員会は、中間段階で授業内容を点検評価し、必要に応じて軌道修正を行う。授業「デザインの進め方」と「リビングデザイン」、「地域産業史」と「地域経済」や「経営管理」などが該当する。

地場産業の生の声を授業に反映し、大学の取組姿勢を地元産業関係者や一般市民に十分に説明し、公開性を高めた。例えば“炉端談義シンポジウム”と“同展示会”の開催。また、事業の締め括りに“特色・現代3GP採択記念フォーラム”と“同作品展”を本学で開催し、一般市民や地元産業関係者などの聴衆と意見交換を行った。

高岡銅器・セレクトショップバイヤーと学生の連携プロジェクト“セレクトショップバイヤーの意見に基づく商品開発”では最終的に高い評価を得て商品化が決定した。学生はインターンシップと同等の有意義なプロジェクト体験が出来た。なお、商品はギャラリー等で市販されている。

#### 実施体制

平成16年度10月（選定時点）に、地場産業関係者・自治体関係者8名、教員10名、学生6名、合わせて24名を募り“「炉端談義」委員会”を組織した。原則、月一回の「炉端談義」委員会を開催、計16回開催して事業内容を検討。2度のフォーラムや展示会等を開催した。

#### 各年度毎の実施内容

平成16年度後期事業として、情報収集着手という観点から、1)地域ビジネス学科は“伝統的工芸品の保有ニーズ調査”を実施。2)産業造形学科、産業デザイン学科及び地域デザイン学科の三学科は「連鎖型授業」授業計画策定、3)事務局は広報用のWebサイト、「炉端談義」プロジェクトのホームページ立ち上げを実施。サーバーシステム導入・データベースシステム開発を実施し、学習成果や学生作品情報をデータベースに蓄えるシステムを構築。4)地場産業と大学の連携授業として、産業デザイン学科は授業「デザインの進め方（デザインリサーチ）」を実施。5)本学のTsumama Hall（エントランスホール）で“第6回「高岡銅器・漆器の未来を探る！」展”を開催。6)連鎖型授業として「リビングデザイン」実施。7)地場産業と大学の連携を考える業界委員によるプロポーザルWGの報告を実施し、8)その内容を煮詰め「プロジェクト実施計画」を策定した。9)年度末には平成16年度デザインリサーチ報告書『高岡銅器・漆器の未来を探る！』を作成し地場産業関係者に配布。

平成17年度前期には、1)地域ビジネス学科の「伝統的工芸品の保有ニーズ調査」結果報告。2)同報告書『伝統的工芸品のニーズに関するアンケート調査結果の概要（H17.6）』配布。又、3)『伝統的工芸品のニーズに関するアンケート調査結果の概要（H18.1）』も地場産業関係者等に配布した。4)“「炉端談義」委員会メンバーによる講演会”を開催。5)氷見市マイスター事業協同組合と木材工芸コースの連携プロジェクト“地場産杉を使用したインテリア・家具の提案”展を氷見市海浜植物園ホールで開催した。6)一般市民や地場産業関係者を招き、「炉端談義」プロジェクト中間発表会として“「炉端談義」プロジェクトシンポジウム”及び7)“同展示会”を本学で開催。8)金属工芸プロジェクトとして、“小さな鑄物のおみやげ品展”をギャラリーゆづらで開催、9)“第5回 高岡の伝統的工芸品展「未来の工芸士コーナー」への出品”を東京日本伝統的工芸品センターで開催、等がある。

平成17年度後期には、漆工芸プロジェクトで高岡漆器青年会と漆工芸コース学生の連携による3プロジェクトを実施した。1)アクセサリー：「簪」、2)インテリア製品：チエスU（漆塗りチエスセット）、3)食器：「親子井用」・「天井用」・「ビビンバ用」・「中華井用」・「雑炊用」である。なお、“食器”プロジェクトの成果作品は、工芸都市高岡クラフトコンペ入選を果たした。

高岡銅器産業との連携による産業デザインプロジェクトは、4) “連鎖型授業「リビングデザイン」高岡銅器で日用品を創る の作品”、5) “連鎖型授業「デザインリサーチ論」 漆工芸の「おみやげ」について の調査・分析パネル” が有る。

金属工芸コースと高岡銅器産業の連携によるプロジェクトは、6)授業「生型鋳造」の“鋳物のお土産品ペーパーナイフの提案”、高岡銅器・セレクトショップバイヤーと金属工芸学生の連携によるプロジェクトは、7) “セレクトショップバイヤーの意見に基づく商品開発” が有る。プロジェクト締め括りとして、8) “特色・現代3GP採択記念フォーラム” 及び 9) “同作品展” を開催。10)平成 17年度デザインリサーチ報告書『高岡銅器・漆器の未来を探る！—』を作成し配布した。11)委員会では客観的な評価を得るため“「炉端談義」プロジェクト評価シート”を作成し、学外の地場産業関係者や学生中心に配布した。12)その結果とプロジェクト概要を整理した報告書『「炉端談義」方式による地場産業活性化授業実施報告書』を作成し、地場産業関係者に配布した。

#### 目的に対する成果、人材養成面での達成度

地場産業の問題点的な把握について、産業デザイン学科の授業科目「デザインの進め方（デザインリサーチ）」・地域ビジネス学科の「伝統的工芸品のニーズ調査」で多様な角度から調査・分析した。達成度は良好と言えよう。就職への影響は、「デザインの進め方」は学生が地場産業の実態を知る上で役立った。一方、高岡銅器協同組合側にとって、学生の要望や意見を吸い上げる良い機会となった。

地場産業の生の声を吸収できる体制づくりは、プロジェクトに関与した学生はかなり地場の声を理解したと考える。木材工芸プロジェクトは双方にプラスした好事例であるが、全体的には今一歩不足。

地場産業の活性化に直結する授業内容の作成は、授業によって異なる。基本的にこのプロジェクトの授業は全部そうした目標を持っているが、達成度は何か具体的な寄与が出来れば上出来と言えよう。

授業の円滑な運営について、教員に多数の実務経験者が含まれており、プロジェクトに参加した教員は十分に管理運営能力を有し、目標は十分達成出来たと考える。

授業間の効果的連鎖体制の確立は、本取組の骨子である。自身がコントロール出来る範囲であれば効果的な連鎖も可能である。しかし、複数人の連携は調整が必要でかなり難しい。達成度は今一歩。

適切な評価軸の確立について、「プロジェクト評価シート」を作成したことでかなり明確な評価軸を作成出来たと考える。但し、完成度を考慮すると未だに改訂が必要とされ、更に改善を要する。

授業成果の地域への公開は、プロジェクト成果発生の都度公開を心掛けた。“炉端談義シンポジウム”、“特色・現代3GP採択記念フォーラム”と共に“展示会”を必ず開催した。“報告書”、“ホームページ”、“メディア”等を通じて常に説明・公開を心掛けた。達成度は良好。

#### 自大学の教育改革への影響、他大学等への波及効果、地域社会等への波及効果

自大学の教育改革への影響として、H16年度に選定された特色GP“学内を学生作品で埋めつくそうプロジェクト”と、現代GP“「炉端談義」方式による地場産業活性化授業”の成果や活動基盤がベースとなり、H19年度は新しく現代GP「出会い・試し・気づき・つなぐ芸術文化教育」が選定されるなど地場産業振興に効果的に寄与できる授業の更なる展開を目指している。

他大学等への波及効果について、「H16年度特色GP」選定に引き続き、今回の「H16年度現代GP」選定は、短期大学が二冠を達成したと言うことで、現代GPポスターセッション（東日本会場）では、短大関係者からの問い合わせや、はげましの声掛けられた。また、本学の提案内容が地場産業振興をテーマにしていることから、数校の担当者から本学の取組が大変参考になるとの声があった。

地域社会等への波及効果について、今回のプロジェクトには教員・学生と地場産業の関係諸団体：氷見市マイスター林業協同組合・高岡銅器産業・高岡漆器産業・漆器青年会・高岡市商工労働部中小企業課・高岡商工会議所事業部事業課等が関わり連携したプロジェクトである。活動が進捗し、展示会や大会を重ねる度に、短大創設以来20年経過したが「長年大学に期待していた機能がようやく実現した」との声が聞かれた。

#### 学生等の評価

木材工芸コース学生の事例では、林業の実情をほとんど知らなかった学生達はプロジェクト授業を通して

様々な事を学んだ。特に、杉林の現状を自分の目で見た事や、林業を支えている方々の話を直に聞いた事が貴重な体験だった。学生は、提案作品が林業関係者の意図を汲み取ったものか不安だったが、組合の方々は柔軟に受け止めて下さった。

「セレクトショップバイヤーの意見に基づく商品開発」では、商品としての物づくりを学べる事や、自分の作品が商品として販売される事など、興味深いプロジェクトであったとの意見に集約した。しかし、当初はデザイン案全部が却下され、コンセプトシートの見直しが要求されるなど、学生デザインと言う甘い評価ではなく、バルス商品としての販売可能性を探る厳しい評価であった。2度目の提案でクリアし、数点商品化が実現した。学生にとって初めての経験であり、現場の厳しさを痛感したと思われる。デザイン案深耕の機会が与えられ、再チャレンジした商品開発プロジェクト体験とその成功は、教育的効果が大きかった。

漆プロジェクトでは、学生の意見が非常に新鮮で普段の仕事では思いも付かない事も多く、青年会メンバーにとり勉強になった。学生も職人と接した事で高岡漆器業界が少しは理解されたと思われる。プロジェクト作品が見事クラフトコンペに入選した。この活動が今後に繋げて行ければ良いと思う。

#### 学外からの評価

東京・池袋「全国伝統工芸品センター」での第4回(H16)・第5回(H17)高岡の伝統工芸品展「未来の工芸士コーナー」に、専攻科生や「炉端談義」委員会学生委員の授業「装飾品入門」の作品を出展したところ、観覧者から高い評価を受けると共に見学したいとの声が上がった。それ以降、現在も継続して出品し続けている。

“小さな鋳物のお土産品の提案”金属工芸プロジェクトは、学生が商品を創り売るという観点から、物創りの貴重な体験が出来る魅力的なプロジェクトであった。提案作品は20歳前後の年代が何を欲するかを如実に物語る側面を持つ。17名が制作した中から、関係者投票審査により3名の提案作品の商品化が決定した。

「地場産杉を使用したインテリア・家具の提案」について氷見市マイスター事業協同組合関係者は、地場産杉の促進に悩む林業関係者に新たな息吹を与えたとの事。欠点より長所に目を向け、環境問題対策や役割にスポットを当て、杉材特有の性質である柔肌・調湿性を表現している提案家具を早く製品化したいとの意向。家具・食器・玩具など多様な作品の豊かな感性と斬新なデザインに驚き、学生の若いエネルギーが、間伐材の利用促進と地域資源の有効活用に役立つと確信しているとの事である。

報道の反応について、地場産業振興をテーマとした大学の教育プロジェクトと言うことで、委員会やプロジェクト・イベントの都度、報道各社に案内を出した所、基本的に地場のイベントと言うことで、地元の富山新聞・北日本新聞の両紙に主に掲載された。北日本新聞にはほぼ毎回取り上げて頂いた。この報道が地域の方々に「炉端談義」プロジェクトの“地域と一体となった授業計画・実施・評価委員会によるものづくり教育”の具体的な活動内容の広報・紹介に大変役立ち、円滑な活動推進に繋がったと考える。

#### 取組支援期間終了後の展開

取組の成果を活かした継続的な事業の実施について、氷見市マイスター事業協同組合と木材工芸コースの連携プロジェクト“地場産杉を使用したインテリア・家具の提案”は平成17年度に開始したが、非常に好評で「炉端談義プロジェクト」は平成17年度で終了したが、プロジェクトは2年間延長し、3年連続して今年度も実施されており、専用ホームページも作成し備えている。

東京・池袋「全国伝統工芸品センター」の“高岡の伝統工芸品展「未来の工芸士コーナー」”に、授業「装飾品入門」の学生作品を出展したところ好評であったため、平成16年以来継続し今年度も出品予定である。

新たな事業展開の計画等について、H16年度選定の特色GP“学内を学生作品で埋めつくそうプロジェクト”と今回のH16年度選定の現代GP“「炉端談義」方式による地場産業活性化授業”の成果や活動基盤がベースとなって、今年度申請した「H19年度現代GP“出会い・試し・気づき・つなぐ芸術文化教育”」が新たに選定されている。このプロジェクトは、正に「炉端談義」プロジェクトの理念を継続し、機能的に拡張したものであると考える。

本件お問合せ先 富山大学高岡地区総務管理課地域連携室

TEL: 0766-25-9139

FAX: 0766-25-9212

E-mail: tiikiko@adm.u-toyama.ac.jp